

自閉スペクトラム症幼児へのソーシャルワーク実践モデル による支援に対する保育を学ぶ学生の見解

松 山 郁 夫

Recognition of the Support for Children with Autism Spectrum Disorder
by the Social Work Practice Model in University Students Learning Childcare

Ikuo MATSUYAMA

要 旨

本研究では、自閉症幼児へのソーシャルワーク実践モデルに基づく支援に対する保育を学ぶ学生の認識について検討した。保育を学ぶ学生111名を対象として、独自の質問項目を記載した質問紙調査票による調査を実施した。得られた回答に対して、各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、各項目についてPromax回転を伴う主因子法による因子分析を行った結果、4因子が抽出された。保育を学ぶ学生は、自閉症幼児へのソーシャルワーク実践モデルに基づく支援に対して、「適切な保育課題による対応」、「発達の視点からの対応」、「受容的交流による対応」、「社会性を高める対応」の4視点から捉え、この順に有効と認識していると考察した。

キーワード：自閉スペクトラム症、自閉症幼児、保育を学ぶ学生、ソーシャルワーク実践モデル

I. はじめに

ソーシャルワークでは、ソーシャルワーカーとクライアントとの間に人格的交流がなされる。ソーシャルワーカーとの間の専門的援助関係は、クライアントにとってコミュニケーション能力・社会的スキルを身につける等の社会適応力を高め、全人的な成長の機会となる。したがって、福祉を要する場合、ソーシャルワーク実践モデルを適用した支援が求められる。

自閉症（DSM-5では「自閉スペクトラム症」とされているが、以降「自閉症」と記述する）は、社会的相互作用の障害、コミュニケーションの障害、想像力の障害の3つの特徴（三つ組）から定義される障害である（Wing 1996）¹⁾。三つ組の現れ方で、自閉症の症状が明確なカナー型から一見自閉症と見られないものまでかなりの幅があるため、連続体（スペクトラム）として認識されている。自閉症児に対する支援には多くの困難さがあるため、ソーシャルワーク実践モデルを活用した支援が不可欠である。しかしな

がら、対象となる自閉症児よりも、その親等の家族を主としたソーシャルワークになりがちであるため、自閉症児を中心にした支援を充実させていく必要がある。

自閉症には他者との社会的相互交渉や社会的関係性に遅れや障害がある (McConnell 2002)²⁾。また、知的障害がない場合であっても、他者とのコミュニケーション、心的状態の理解、対人関係の面で困難さがある (神井・藤野・小池 2015)³⁾。したがって、自閉症児の社会性を高める視点が重視されよう。

そこで、自閉症児に対する有効なソーシャルワーク実践モデルとして、「クライアントの上手さ、豊かさ、強さ、たくましさ、資源等ストレングスに焦点を当てることを強調するストレングス視点」、「クライアントが本来もっている力、潜在的な力に着目しながら、その力を引き出し、積極的に援助することを通して、クライアントが問題に気づき、自己決定能力を高めるエンパワメントアプローチ」、「クライアントと援助者が共同の関係性のなかで新たなストーリーを生成し、問題状況からの決別を図る援助方法であるナラティブアプローチ」、「人間を全体として包括的に捉える見方で、全人的な捉え方とされているホリスティックな視点を持つ心理社会的アプローチ」があげられる。なお、モデルによって焦点の当て方が異なるため、一つのモデルに固執し過ぎず、各モデルを状況に応じて混成活用をしていく柔軟な取り組みが求められよう。

上述したソーシャルワーク実践モデルに関して、社会福祉士養成に使用されているテキスト⁴⁾⁵⁾⁶⁾をまとめてみると、次のように述べられている。

ストレングス視点とは、クライアントの病理・欠陥ではなく、強さ・能力を具体的に引き出しながら、課題を解決していくポジティブな意味づけをする。支援課題把握の際、治療モデルでは問題を分類し、直接的因果関係として特定しようとするのに対し、ストレングスモデルでは強さを見出し、意味づけをする。つまり、治療モデルが客観的証拠を重視するのに対し、クライアントのナラティブを尊重し、主観性・実存性を強調する。ポジティブな意味づけで、治療モデルと異なるクライアント像を見出すことができる。また、個人が複数のストレングスを持っていることに加え、グループや地域社会・コミュニティといった外部環境の強さにも、複眼的に着目することが期待される。このため、ソーシャルワーカーには、クライアントのナラティブ (クライアントの語る物語) を尊重し、主観性を強調するだけでなく、自らのストレングスに気付くような支援をする技能が要求される。

エンパワメントアプローチでは、クライアントの潜在能力や能力の強さに焦点を当て、クライアントを問題解決の主導者とし、ソーシャルワーカーは側面的支援を行う。エンパワメントの視点は生活モデルの実践展開に方向性を与えるものであり、ミクロの個人的問題に対する心理調整とマクロの社会構造の改革への援助を行う。適用対象は、障害、人種、貧困、性など社会的マイノリティを理由に抑圧されたパワーレスな人々であり、彼らの抱える問題全般である。クライアントが自らの否定的で抑圧的な状況を認識し、潜在能力に気づき、能力を高めながら、抱える問題に対処し、抑圧状況の要因を変革することに焦点をおく。クライアントとワーカーとのパートナーシップを通して、クライアント自身がエンパワメントしていくことが目標となる。展開の方向性は生活モデルである。

ホリスによって提唱された心理社会的アプローチの起源は、リッチモンドが確立したケースワーク理論にある。人と環境との間を意識的に調整しながら、その人のパーソナリティを変容・発達させることに特徴があり、クライアントの社会的特長とパーソナリティを捉える社会診断を重視している。適用対象は、支援を要するすべての人で、特に家族関係の課題、精神医学的課題、医療的課題の解決に適応可能である。クライアントとソーシャルワーカーのコミュニケーションを通して、パーソナリティの変容を促し、人と状況の相互作用を高め課題を解決していく。その際、両者の関係性が重要で、課題解決の動機づけが必要である。パーソナリティの変容・機能向上には、コミュニケーションを通して、人と状況、相互の機能不

全を解決することで課題の解決を図っていく。このため、クライアントの社会的状況とパーソナリティを捉える社会診断を要する。

ナラティブアプローチでは、クライアントの語る物語を通して援助を行う。現実として存在・支配している物語を共同で見出し、新たな意味世界を作り出すことで、問題状況から決別させる。クライアントの生活や人生を否定的にとらえるのではなく、肯定的かつ建設的に捉えることができるような支援を行う。クライアントとソーシャルワーカーが関係性の中で新たなストーリーを生成し、問題状況からの決別を図る援助方法である。ストレングスアプローチの一種であり、「いま、ここで」の対話・解釈という治療的対話がなされる。支援の焦点は、クライアントが生活・人生を肯定的に認識できるように支援、人生のストーリーを理解し、新たなストーリーにすることで人生の再構成を図っていく。

これらの実践モデルについては、要援護者の状況を前向きに変化させるように理論化されたものであるため、保育や障害児に対するソーシャルワークにも活用できると考えられる。

昭和32年から34年までの3年間、厚生省児童局は「保育児童ケースワークの事例集」(1957～1959)を編纂し、児童局職員らが全国の保育所から寄せられた事例に対して「評」として助言することで、保育所におけるケースワークの理論と実践的方法論を示した。この「評」分析から、乳幼児の個別理解とケースワークを用いた家庭支援によって、保育所の独自性が行政主導で築かれはじめたことを明らかにした。保育児童のケースワーク事例集の事例分析からは、「保育所の保育実践に認められるケースワーク要素を指摘し、評価する方法を通して保育のケースワーク要素を育てようとした」、「投稿された保育実践事例には、すでにケースワーク要素が認められることが整理された」とされている⁷⁾。保育におけるソーシャルワークについては、60年ほど前から必要性が示され、これまで展開がなされてきたものと窺える。

精神疾患の診断・統計マニュアル第5版(DSM-5; American Psychiatric Association, 2013)における自閉症の診断基準の一つに、複数の状況での社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥があると記されている⁸⁾。

対人関係に関する特性として、人の気持ちを理解することが難しく、対人関係の調節が難しいことが挙げられる。その特性が理解されていない環境では適応が難しく、身体症状や抑うつ症状といった二次障害が生じることもある。福祉や医療の基準では、自閉症に該当するのは人口の約1%から2%であるが、障害とはいえないまでも自閉症の特性をもつ者は人口の約10%いる(本田 2015)⁹⁾。自閉症の特性への理解への支援や社会適応への支援を必要とするケースがかなり多いと推測される。

自閉症を有する幼児(以下、「自閉症幼児」と記述する)の場合、障害特性に対する周囲からの理解が乏しいゆえに、二次的障害を引き起こす危険性が高い。保育における自閉症幼児へのソーシャルワークを充実させるためには、その実践モデルを活用したものを「相談援助」の内容に盛り込む必要がある。これらより、保育士養成における科目である「相談援助」において、ソーシャルワークの実践モデルを学び、保育所において実習を経験した学生が、自閉症幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援について、どのように捉えているのかを明らかにすべきであろう。勿論、幼児の親等の家族へのアプローチが欠かせないが、本研究では、自閉症幼児へのソーシャルワークを中心にしながら検討していく。

以上より、本研究の目的は、自閉症幼児へのソーシャルワーク実践モデルに基づく支援に対する保育を学ぶ学生の認識を明らかにすることとする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査対象と調査項目

本研究では、保育を学ぶ学生を対象として、自閉症幼児へのソーシャルワークの実践モデルに基づく支援の有効性をどのように捉えているのかを問う、独自の質問を記載した質問紙票による調査を実施した。

調査対象は、A県B市C大学において保育士の取得を目指し、保育所実習の経験があり、先述したソーシャルワーク実践モデルを学んでいる3年生とした。合計111名からの質問紙調査票が回収され、分析対象とした。

調査項目には、回答者のプロフィールに関する学年・性別を付記した。分析対象者は、男性5名(4.5%)、女性106名(95.5%)、計111名であった。

2. 調査期間と調査方法

調査期間は、平成29年1月とした。

調査方法は、C大学において保育を学ぶ学生に本調査の目的を説明し、協力することを了承した学生に調査票を配付し、その場で回答してもらった。

倫理的配慮として、回答は個人を特定できないように数値化して集計すること、回答の協力は任意であること、および回答への記入は無記名で行うこと等を説明し、同意を得られた学生のみ質問紙調査票を配布し、回答を求めた。

3. 調査項目の作成手順

保育を学ぶ学生10名に、幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援が、どのようなことに役立つかを問うた。回答は箇条書きで思いつくだけ書いてもらうようにした。得られた回答のうち複数回答のあった内容をすべて使用して、28項目の質問項目を作成した。なお、ソーシャルワークは、各対象の状況に応じてきめ細かく行う必要がある。そこで、回答に含まれている意味内容をなるべく細分化しながら質問項目の作成を行った。

自閉症のある幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性の度合いを問う独自の28項目の質問項目における回答は、「まったく有効でない」(1点)、「あまり有効でない」(2点)、「どちらとも言えない」(3点)、「ある程度有効である」(4点)、「かなり有効である」(5点)までの5段階評価とした。なお、各質問項目について、等間隔に並べた1～5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

4. 分析方法

以上の質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。

次に、各質問項目についてPromax回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごとの項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示した。

さらに、各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を用いて、各因子間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がある場合の一元配置分散分析を行った。

加えて、各因子のCronbachの α 係数を求め、各因子別、及び全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

Ⅲ. 結 果

自閉症幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性の度合いを問う、独自の各質問項目における平均値と標準偏差は表1の通りであった。平均値の最小値は3.27（「16. 鬼ごっこ等集団でルールのある遊びをする」）で、最大値は4.59（「8. 課題が達成できるようにスモールステップを示す」）であった。全28項目中、18項目が3点台（64.3%）、10項目（35.7%）が4点台であった（表1）。

これら28項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.75であった。Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 1327.436 $p < .01$ ）。このため、28項目については因子分析を行うのに適していると判断した。

28項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は7.22、3.39、1.99、1.51、1.36、1.18……というものであり、スクリープロットの結果からも4因子構造が妥当であると考えられた。そこで、4因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を除外して、再度、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の因子パターンは表2の通りであった。回転前の4因子で23項目の全分散を説明する割合は55.25%であった。なお、これら23項目について、Kaiser-Meyer-Olkinの標本妥当性の測度は0.82であった。また、Bartlettの球面性検定では有意性が認められた（近似カイ2乗値 1043.207 $p < .01$ ）。

各因子のCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子0.87、第2因子0.81、第3因子0.75、第4因子0.73、全項目0.88との値を示したことから、各因子別に見ても、全体としても、内的一貫性を有すると判断された。

第1因子は8項目で構成され、「16. 鬼ごっこ等集団でルールのある遊びをする」、「15. 皆と一緒に遊べるようにする」、「17. 他児とコミュニケーションをとれるようにする」など、対象児が集団の中で遊んだり、他児とコミュニケーションをとったりしながら、社会性を高めていくことに意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「社会性を高める対応」因子と命名した。

第2因子は9項目で構成され、「21. 発達に合わせた保育室の環境を作る」、「2. 発達段階に応じた働きかけをする」、「28. 保育者との信頼関係を築いていく」など、対象児の発達に応じた環境や働きかけに意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「発達の視点からの対応」因子と命名した。

第3因子は3項目で構成され、「6. 適切な課題を設定する」、「8. 課題が達成できるようにスモールステップを示す」、「7. 課題の達成感を味わう」で、保育における対象児の発達に必要な課題の設定と指導方法に意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「適切な保育課題による対応」因子と命名した。

第4因子は3項目で構成され、「11. 自己主張が苦手な幼児の気持ちを受容する」、「10. 反抗的態度をする幼児の気持ちを受容する」、「9. 示している行動に肯定的な意味づけをして伝える」で、対象児の気持ちを受容しながら働きかけていくことに意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで、「受容的交流による対応」因子と命名した。

因子別の平均値は、第1因子3.58（SD0.65）、第2因子4.09（SD0.51）、第3因子4.29（SD0.60）、第4因子3.80（SD0.68）であった。各因子間の平均値について対応がある場合の一元配置分散分析を行った結果、4因子の平均値間には有意差が認められた（表3）。さらに、各因子の平均値に対して多重比較を行った結果、各因子間すべてに有意差が認められた（表4）。

このため、保育を学ぶ学生は、自閉症のある幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性について、第3因子「適切な保育課題による対応」、第2因子「発達の視点からの対応」、第4因子

表1 ソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性に関する質問項目における平均値・標準偏差

質問項目	平均	標準偏差
1. 苦手なことをできるようにする	3.82	.876
2. 発達段階に応じた働きかけをする	4.06	.937
3. 自発的に一日の流れに沿って動く	3.77	1.035
4. 問題行動が起こった背景を探る	3.91	.890
5. 興味・関心・得意なこと等の強さに気づく	4.22	.802
6. 適切な課題を設定する	4.23	.762
7. 課題の達成感を味わう	4.05	.851
8. 課題が達成できるようにスモールステップを示す	4.59	.564
9. 示している行動に肯定的な意味づけをして伝える	3.77	.863
10. 反抗的態度をする幼児の気持ちを受容する	3.79	.821
11. 自己主張が苦手な幼児の気持ちを受容する	3.84	.837
12. 良いところを伸ばしていく	4.40	.664
13. 情緒的に不安定な場合には安定させる	3.91	.869
14. 気持ちに寄り添う	4.06	.812
15. 皆と一緒に遊べるようにする	3.31	.989
16. 鬼ごっこ等集団でルールのある遊びをする	3.27	.953
17. 他児とコミュニケーションをとれるようにする	3.44	.891
18. 模倣行動を増やしていく	3.77	.805
19. 親との愛着を形成できるようにする	3.86	.872
20. 人との関わりが苦手でも安心して過ごす	3.73	.972
21. 発達に合わせた保育室の環境を作る	4.17	.851
22. 地域住民との交流を深めていく	3.44	.931
23. 遊びを広げていく	3.82	.765
24. 社会性を育成する	3.81	.848
25. 感情をコントロールできるようにする	3.67	.898
26. 相手のことを考えることができるようにする	3.51	.913
27. 個性に応じた働きかけをする	4.37	.631
28. 保育者との信頼関係を築いていく	4.28	.703

n=111

表2 ソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性に関する質問項目における因子分析結果

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子「社会性を高める対応」				
16. 鬼ごっこ等集団でルールのある遊びをする	.904	-.284	.089	.022
15. 皆と一緒に遊べるようにする	.812	-.144	.024	.109
17. 他児とコミュニケーションをとれるようにする	.737	.113	.148	-.171
1. 苦手なことをできるようにする	.603	-.050	.031	-.126
25. 感情をコントロールできるようにする	.582	.281	-.151	.096
24. 社会性を育成する	.580	.100	.030	.052
18. 模倣行動を増やしていく	.481	.186	.000	-.068
26. 相手のことを考えることができるようにする	.478	.242	-.231	.299

第2因子「発達の視点からの対応」				
21. 発達に合わせた保育室の環境を作る	-.092	.699	-.029	-.042
2. 発達段階に応じた働きかけをする	.193	.614	.035	-.274
28. 保育者との信頼関係を築いていく	.090	.592	.017	-.015
19. 親との愛着を形成できるようにする	.177	.564	-.044	-.031
27. 個性に応じた働きかけをする	-.106	.546	.296	-.118
20. 人との関わりが苦手でも安心して過ごす	-.003	.531	-.123	.221
14. 気持ちに寄り添う	-.212	.508	.039	.253
12. 良いところを伸ばしていく	-.106	.419	.232	.025
13. 情緒的に不安定な場合には安定させる	.073	.401	.098	.152
第3因子「適切な保育課題による対応」				
6. 適切な課題を設定する	.062	-.058	.746	.078
8. 課題が達成できるようにスモールステップを示す	.107	.144	.645	.016
7. 課題の達成感を味わう	-.008	.100	.536	.241
第4因子「受容的交流による対応」				
11. 自己主張が苦手な幼児の気持ちを受容する	-.066	.011	.009	.847
10. 反抗的態度をする幼児の気持ちを受容する	-.062	.045	.158	.738
9. 示している行動に肯定的な意味づけをして伝える	.185	-.187	.190	.423

n = 111

表3 ソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性に関する質問項目における分散分析の結果

区分	平方和	自由度	平均平方	F値
支援	33.264	3	11.088	45.227*
被調査者	84.754	110		
誤差	80.905	330	.245	
全体	198.923	443		

*p < .05

表4 ソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性に関する質問項目における多重比較による各因子の平均値の差

	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子「社会性を高める対応」	.518*	.716*	.223*
第2因子「発達の視点からの対応」		.198*	.294*
第3因子「適切な保育課題による対応」			.492*
第4因子「受容的交流による対応」			

*p < .05

「受容的交流による対応」、第1因子「社会性を高める対応」の順に有効性があると捉えていると示唆された。

IV. 考 察

自閉症幼児の発達を促すためには、発達初期の環境を構成する養育者等との相互作用が重視されており、自閉症のある幼児と養育者等の課題とニーズを包含する生態学的視点をもつ必要がある(山下2012)¹⁰⁾。第1因子「社会性を高める対応」は、保育を学ぶ学生が、自閉症のある幼児の発達を促すために、親や保育者等との相互作用から成立する関係性の形成を通して、その社会性を高めるような支援を重視していることを表していると考えられる。

自閉症児に対しては、早期から彼らの特性をよく理解した上で動機づけを高く調整し、必要な社会的学習が可能な環境を整えることによって、苦手な領域である対人・コミュニケーション能力も時間をかけて少しずつ獲得できていく(神尾, 2008)¹¹⁾。そのためには、対象児の発達段階を把握し、それに基づいた支援が不可欠となる。したがって、第2因子「発達の視点からの対応」は、保育を学ぶ学生が、自閉症のある幼児の発達を促すために、親や保育者等との相互作用から成立する関係性の形成を通して、その発達を促すような支援を重視していることを表していると考えられる。

個々の子供の保育課題を明らかにすることは、子供の現在の姿(活動や関係、発達など)を捉え、どのような課題が得られるのかを明らかにし、次の指導計画、クラスの指導計画を作るための根拠になる(住野ら2005)¹²⁾。このため、第3因子「適切な保育課題による対応」は、保育を学ぶ学生が、自閉症幼児の発達を促すために、個々の子供に適切な保育課題を明確にした支援を重視していることを表していると考えられる。

保育者の働きかけとそれに対する自閉症幼児の反応を分析し、その興味や関心に合わせて保育者が遊びに寄り添うことが彼らからの応答を引き出し、相互交渉を成立・展開させる。また、自閉症幼児から適切な反応を引き出す保育者は、その障害特性や行動面の発達の变化をポジティブに評価しているため、自閉症幼児に対する大人の捉え方と働きかけには関連がある(狗巻2012, 2013)¹³⁾¹⁴⁾。したがって、第4因子「受容的交流による対応」は、保育を学ぶ学生が、自閉症のある幼児に対して、その興味や関心を尊重し、寄り添いながら受容的な態度による支援を重視していることを表していると推察される。

保育課題におけるねらいや目標をどのように構成するかということは、長期・短期(期案・週案・日案)に問わず、子供の育ちに大きく影響を与える(住野ら2005)¹⁵⁾。そのため、個々の保育課題は、子供の発達を促進するために、発達段階を踏まえたものである必要がある。つまり、発達の視点からの対応が不可欠と言える。

さらに、自閉症児の育て方について、「人としての発達が可能な限り適正に進んでいくこと」を目指し、そのために不可欠な「人間関係を育てること」と、それを土台として「子供自身が自発的に周囲の人や環境と関わりながら発達を遂げていく力(自我)を育てること」が何よりも大切と指摘されている(石井2009)¹⁶⁾。これは、受容的交流療法の目標でもあり、他者との人間関係の交流を通して行動を展開させていく方法をとる場合に、ストレングス視点(strengths perspective)からのアプローチが成り立ち、対人交流や相互作用を重視するため、社会性を高めることに繋がると考えられる。これらより、保育を学ぶ学生は、自閉症幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性について、第3因子「適切な保育課題による対応」、第2因子「発達の視点からの対応」、第4因子「受容的交流による対応」、第1因子「社会性を高める対応」の順に有効性があると捉えていると言えよう。

V. 結 論

自閉症のある幼児における個々の保育課題には、子供の発達を促進するために発達の視点からの対応が求められる。他者との人間関係の交流を通して行動を展開する場合に、ストレングス視点から対人交流を進め、社会性を高めていく必要がある。このため、保育を学ぶ学生は、自閉症のある幼児に対するソーシャルワーク実践モデルに基づく支援の有効性について、「適切な保育課題による対応」、「発達の視点からの対応」、「受容的交流による対応」、「社会性を高める対応」の視点から捉え、この順に有効と認識していると考察した。

引用文献

- 1) Wing, L. The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals, London, Constable and Company 1996
- 2) McConnell, Interventions to facilitate social interaction for young children with autism: review of available research and recommendations for educational intervention and future research. Journal of Autism and Developmental Disorders, 32(5) 351-372 2002
- 3) 神井享子・藤野博・小池敏英 自閉症スペクトラム障害における心の理論と実行機能の関係についての研究動向 東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅱ 66 319-332 2015
- 4) 社会福祉士養成講座編集委員会編集 新・社会福祉士養成講座 8 相談援助の理論と方法Ⅱ 第3版 中央法規出版 2015
- 5) 岩間伸之・白澤政和・福山和女 MINERVA 社会福祉士養成テキストブック 4 ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ 第3版 ミネルヴァ書房 2010
- 6) 福祉臨床シリーズ編集委員会編 柳澤孝主・坂野憲司責任編集 社会福祉士シリーズ 8 相談援助の理論と方法Ⅱ 第2版 弘文堂 2014
- 7) 田澤薫 保育所保育の独自性を探る：『保育児童のケースワーク事例集』にみる幼児理解とソーシャルワーク 聖学院大学論叢 29(2) 1-14 2017
- 8) American Psychiatric Association (Ed.). Diagnostic and statistical manual of mental disorders. fifth edition. Washington. DC: American Psychiatric Publishing. 2013
- 9) 本田秀夫 自閉症スペクトラムがよくわかる本講談社 2015
- 10) 山下洋 自閉症スペクトラム障害の早期介入と環境調整 特集発達障害の早期発見・早期療育 滝川一廣・小林隆児・杉山登志郎・青木省三(編) そだちの科学 18 15-21 2012
- 11) 神尾陽子 自閉症への多面的アプローチ—発達というダイナミックな視点から— そだちの科学 (11) 10-14 2008
- 12) 住野紀子・富岡量秀・奥村隆介・玉置哲淳 観察事例からカリキュラム編成への試み—関係活動モデルによる分析を通して— エデュケア 25 47-64 2005
- 13) 狗巻修司 保育者のはたらきかけと自閉症幼児の反応に関する縦断的検討：共同注意の発達との関連から 発達心理学研究 24 295-307 2013
- 14) 狗巻修司 自閉症幼児との相互交渉における保育者のかかわり方に関する検討：かかわり方と子どものとらえ方の関連について 発達障害研究 34 29-42 2012
- 15) 同上12)
- 16) 石井哲夫 自閉症・発達障害がある人たちへの療育—受容的交流理論による実践— 福村出版 2009

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に、感謝申し上げます。